

生田地区副所長〔副所長所見・生田地区〕

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学情報科学センター 公開日: 2012-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鎌田, 弘之 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/12004

〔副所長所見・生田地区〕

生田地区副所長・鎌田 弘之

2003年から2004年へと切り替わるのにあわせ、情報科学センターは大きく変革しようとしています。10年の長きにわたって所長をお努めになった下坂先生は、大学の情報化への礎を築かれ、その成果は学内外に確固たる評価を得るに至りました。その次として情報技術は、大学教育全体に深く浸透し一体化する時期となりました。阪井新所長の指揮の下、この先数年間で情報科学センターは大きく変貌することになるでしょう。コンテンツ整備とそれを利用した e-Learning の実践、運用に向け、教員、職員とも既成の概念を廃し枠を見直し、国内最高峰の教育・研究システムの構築にかかわって行きたいと考えます。このような時期に副所長を拝命したことは、たいへんではありますがやりがいを感じるところです。

その一方生田キャンパスは、2005年の機器リプレイスに向けて、これまでとは異なった観点で、次期システムの検討を余儀なくされています。これまで利用してきたスーパーコンピュータの廃棄とそれに伴う予算の削減はその代表的な事例です。

確かに、我々が日常的に利用できるパーソナルコンピュータは、十数年前のスーパーコンピュータのレベルに到達しています。しかしながら、現在のスーパーコンピュータは当然の事ながら更に高度な能力を得ており、これまで到底手が出せなかった研究分野が開拓され、各研究機関はその次元で切磋琢磨しています。しかも、スーパーコンピュータのような大型機器は、情報科学センターの様な組織でなければ運用は困難であることを考えれば、このままではコンピュータを利用した研究のレベル低下を懸念せざるを得なくなります。

このような事態に陥らないよう、機器リプレイスについては、教育支援とともに研究支援としても十分な配慮が必要になるものと考えます。幸いにして、現在のコンピュータは、ネットワークを利用することによって相互に接続され、互いに協調しながら作業を行うことが可能になっています。PC クラスタやグリッドコンピュータがそれに当たります。またコンピュータネットワークは、教育の情報化の基礎であり、これらを更に高度に利用することにより、巨大な研究設備を構築することが可能になっています。パーソナルコンピュータを、昼間は教育システムとして活用し、夜間はPC クラスタとして研究利用できるようにし、国内外でも有数の研究設備を構築するよう検討中です。また、そのような設備の構築に、多大な予算を費やすのでは意味が無いとも考えます。これまで情報科学センターのシステム構築を支えてきている本学SEの力をもってPC クラスタを構築し、これを利用する大学の研究者と協調して、システムを育てていければ良いと考えます。すなわち、これまでのように情報科学センターから理工・農学部の利用者に「サービスを提供する」という姿勢は、教育面では維持するものの、研究面では「情報科学センター資産を最大限に有効活用する機会を提供する」という姿勢に転換する必要に迫られるものと考えます。理工学部、農学部の全利用者に理解を求めていきたいと考えます。

また情報関連予算の削減については、情報科学センターの潜在能力を刺激するものと考えます。従来、単一企業に機器が発注される形になっていたことは、システムの円滑な拡充や運用に効果的であったことは間違いないところです。しかしそういった円滑さには、しかるべき予算が費やされていたと考える時期が来たわけです。またそのような状況は、本学にとって、学内システムの構築能力、拡充能力、運用能力の成長に不利益をもたらしていたものとも考えられます。他大学の情報関連組織と

比較した場合、明らかに恵まれていたことを真摯に受け止める必要があるものと思われます。今回のリプレイスを通じ、今まで当たり前と感じていたことの全てについて改めて検討を加え、自らの技術力、運営能力を鍛え、低予算でも国内有数レベルのシステムを実現して、本学の教育、研究に提供できるよう努力したいと考えます。